須山　聡編著：『奄美大島の地域性　大学生が見た島／シマの素顔』海青社，2014年2月刊，352p.，3,400円（税別）

奄美大島と聞いて，まず初めにどのようなことが頭に浮かぶだろうか。一般的には南の島，気候が温暖，台風が多い，本土から遠い島，というイメージをよく聞くが，奄美大島にはそういったイメージを遥かに超越する地域的特徴が潜在している。本書は，そのような奄美大島の地域的特徴を，徹底したフィールドワークによる観察および聞き取り調査，さらに資料調査により克明に描き出したものである。

つまり，いわゆる奄美大島の地誌書ということになるが，他の地誌を扱う書誌と異なる点がある。それは内容の母体が大学生の調査であることである。しかしながら，都市地理学，社会地理学，文化地理学，観光地理学，経済地理学といった地理学諸分野の手法や論理に基づいて議論がなされ，決して大学生のレポート集ではない。洗練され，枠にとらわれない大学生の発想が奄美大島の地域的特徴を鮮明に描き出している。このような調査が可能な奄美大島は大学生のフィールドワークの実践地として好適であると著者は述べている。

構成は『第Ⅰ部　シマとナセ』，『第Ⅱ部　島のすがた』，『第Ⅲ部　ヤマトからの視線』の三部構成であり，それぞれ4つの章で成り立っている。第Ⅰ部では集落・村落を意味する「シマ」と，都市にあたる「ナセ」を視点にその空間構造の把握や地域的な差異を考察している。第Ⅱ部では奄美大島全体を示す「島」を取り上げ，島の景観や文化，地域住民の生活行動などについて詳細な検討がなされている。第Ⅲ部では本土を意味するヤマトからみた奄美大島の場所性，「異郷」「南国」といったイメージ，さらにはそれらを活用した地域振興の現状やあり方を，産業基盤の側面から考察している。以上のように，奄美大島の地域的特徴について多角的に検証がなされている。

第Ⅰ部では，まず第1章で『シマ空間の構造』について考察している。現在のように道路の整備が進むまで，人々の生活行動範囲はシマの内部で完結しており，外部との接触はほとんどなかった。つまり，それぞれのシマごとに特徴がみられ，この地域差や地域的特徴を把握することが奄美大島を理解する上で重要な点であると述べられている。この点を明らかにするために，まず1-1で2つのシマを事例にシマの空間構造モデルを提示し，1-2でシマに居住する住民どうしの社会的結束の強さを共同作業や共同商店の事例，2010年の奄美豪雨災害への対応から明らかにしている。また1-3ではシマ住民の自然観や自然環境への接し方について，妖怪ケンムンを通じて考察している。

続く第2章では奄美大島で最大のナセである奄美市名瀬を取り上げ『中心都市名瀬の発展と再編』について論じられている。2-1では名瀬が都市として発展した過程を時系列的に整理し，2-2でその衰退と都市構造の変化を土地利用調査から分析し，2-3で名瀬再生への取り組みとして再開発事業や市街地活性化事業などについて述べられている。そして，2-4で名瀬市街地の地域構造モデルを提示し，現状と課題について言及している。

第3章はシマの文化的諸相，特にシマの言葉「シマグチ」や，シマウタや踊りに代表される「シマの芸能」について述べられている。シマグチやシマウタはそのシマ独自の価値を有しており，シマの地域性を述べる上で重要な要素である。しかし，その継承が困難な状況にある。この問題について『シマウタの継承と学校の役割』として学校におけるシマグチやシマウタの継承活動の事例を

3-1～3-4で論じている。

第4章では『食生活の変容』としてシマ文化の諸相から食生活について述べられている。奄美大島においても本土と同様にファーストフードやインスタント食品が普及し，かつてに比べて食生活は大きく変容している。しかし，食生活は地域性を色濃く映し出し，奄美大島においてはシマとシマの差異，シマとナセの差異を反映する。またシマによってはフードデザートが形成される懸念もある。これらの点に注目し，4-1ではナセとシマの食生活の違いを年中行事の料理から比較検討している。4-2では高齢者の買物行動や食事に注目しナセ，シマのどちらにおいてもフードデザート化の可能性がある点を指摘している。4-3では油そうめんを事例に儀礼や行事の時に食べられていた料理が日常の食事にもなり，さらには飲食店などで提供されることで商品化された現状を，食生活の拡散と変容としてまとめている。

第Ⅱ部では奄美大島の景観を構成する特徴的な要素を，第5章の『シマ的景観要素の諸相』でまとめている。5-1では農作物や食料を貯蔵するための施設である「高倉」，5-2では敷地囲いや防風の役割を果たす「サンゴ垣」と「防風林」，5-3では奄美大島の伝統的な家屋である「二棟造り家屋」，そして5-4ではUターン者によってつくり出された「「本土式」住宅景観」について土地利用調査をもとに整理されている。

第6章では『生活行動と生活空間』について，6-1高齢者の生活行動，6-2子どもの遊びの空間，6-3高校生の余暇活動として3つの年代に分け，地域住民の生活行動と生活空間を考察している。さらに，6-4では近年見られるようになってきた奄美大島へのIターン移動についても言及している。どの項においても詳細な聞き取り調査からライフパスを作成し，住民の生活行動や生活空間が明示されている。

第7章では奄美大島のシマにおける祭儀を取り上げ，その中から年中行事の一つである豊年祭に注目し『豊年祭の変容』について述べられている。かつて奄美大島では琉球文化圏にみられるノロ信仰がみられ，祭祀の統括を行っていた。7-1ではノロ祭祀について一つのシマを事例に説明されている。しかし，現在ではノロ組織の長が引退し，儀礼の継承者が不在となっている。この現状で儀礼がいかに存続しているのかについて，祭祀のアトラクション化とシマの空間構造の変容の2つをキーワードに7-2と7-3で考察している。

そして第8章では『カトリックの普及と信仰の混淆』として奄美大島におけるカトリックの普及，信仰のあり方を考察している。これを示すためにまず，8-1で奄美大島へのカトリックの伝来について布教過程を地域別，年代別に整理したあと，8-2でカトリックの拡散と定着について主に血縁関係や世帯構成，人口構成から明らかにしている。8-3では一つのシマを事例に，布教の不徹底によりカトリックとシマの年中行事や先祖崇拝といった在来信仰が入り交じったことで，信仰の二重構造が存在することを明らかにしている。

第Ⅲ部は奄美大島の産業基盤を中心に構成されているが，はじめに第9章では既存産業の現状と課題，再構築と展開について『産業基盤の再生と確立』としてまとめている。9-1では農業部門の事例として，たんかん，さとうきび，島バナナを取り上げ生産基盤の確立，販路の確保といった課題に言及し，ブランド化やアグリツーリズムのアトラクションとしての可能性も指摘している。これに続き工業部門では9-2で奄美大島紬産業，9-3で黒糖焼酎製造業について述べられている。奄美大島紬では衰退傾向にある紬産業の衰退過程とその要因を指摘し，今後の産地存続の可能性について言及している。一方で黒糖焼酎製造業では，新たな技術の導入や商品構成の多様化を進めた地場

の企業グループの参入によって黒糖焼酎が紬をしのぐ奄美大島の基幹産業に成長した点を指摘している。

第10章『自然を消費する観光の創出』では観光業について述べられている。奄美大島はこれまで多くの観光地が通過してきたマスツーリズムを経験せず，独自の観光スタイルを構築しつつある。この現状を10-1観光資源の商品化，10-2ホスト側の取り組み，10-3ゲストの動向とメディア利用にわけて分析している。そして奄美大島の観光のあり方としてエコツーリズムが適していると結論づけている。

その一方で，新たなマスツーリズムとしてスポーツ合宿の存在も指摘している。第11章『新たな団体観光』では1990年代に始まった奄美大島でのスポーツ合宿が一つの観光スタイルとして定着していると述べられている。11-1～11-4では，その現状とスポーツ合宿が地域へ定着する社会的条件を，行政の対応や合宿団体の入り込み状況などから論じている。

そして第12章では『地域文化の観光資源化』として，食文化の観光化について奄美大島の代表的料理である鶏飯を事例に論じている。12-1で食に対する地理学の考えとフードツーリズムについて整理し，12-2と12-3で鶏飯の観光資源化，商品化の過程を明示している。12-4では鶏飯が本来は本土を意識して生み出された料理である点を指摘し，現在では観光客にとっても奄美大島の住民にとっても，鶏飯が奄美大島という空間を示す記号として働くようになったと論じている。また，奄美大島が外部からの視線や影響を強く意識してきた地域であるという特徴を，鶏飯を通じて描き出している。

以上，本書の内容から評者は以下の3点について指摘しておきたい。第1に，先に述べたとおり，本書では奄美大島の地域的特徴をフィールドワークや聞き取り調査といった地理学が伝統的に行ってきた調査手法に基づき，さまざまな角度から検証している点である。著者が序章で述べているように，2002年度から始められた奄美大島の地域調査は，調査報告書が10号，9冊刊行され，その調査のメリットは計り知れない。同じ地域での定点観測や継続調査，経年変化の追跡は地理学において成果があるとされるが，まさに継続的な調査の大いなる成果である。その内容を母体に編集された本書は，奄美大島の地域性を理解する上で既存のレベルを大きく上回るものである。今後，奄美大島について考える上での必読書になるであろう。

第2に，調査内容は地理学諸分野を網羅しており，各分野へ論理を応用することが可能である点である。例えば，第2章で述べられている中心市街地の衰退と構造変化については，日本の多くの地方都市が抱える問題であり，他地域との差異の検証や，奄美大島での事例を他地域に当てはめることが可能であろう。また，第3章で述べられている文化の継承問題では，奄美大島にように学校教育に地場の文化を取り入れることで新たな継承者を生み出す取り組みは各地で行われており，奄美大島は一つの事例としてとらえることができるだろう。

第3に著者による大幅な加筆，修正は加えられているものの，骨子は大学生3年生の地域調査である点である。本書に掲載された図表は大学生が奄美大島で調査したものがほとんどであり，土地利用図や住民のライフパスの図などは，大学生が景観観察と聞き取り調査を根気強く行った成果である。地理学を専攻する大学院生や，中には地理学を教える教員であってもまともなフィールドワークが出来ない者が多くなりつつある状況下で，本書は大学生がここまでできるのか，という動機付けになるものである。地域調査のあり方を

再確認する上でも本書が果たす役割は大きいと考
える。

（齋藤譲司）